

2026 年 9 月 8 日

世界一賢い AI より、世界一使われる AI

中国は「別のゲーム」を始めた

USA 最高のAI
OpenAI
Google
ANTHROPIC
Meta
Microsoft
xAI
CLOSED
High Performance
High Cost
High Security

CHINA 使われるAI
DeepSeek
Qwen
Kimi
OPEN
Low Cost
Customizable
Rapid Deployment

AIは、どちらの未来を選ぶのか。
そして、私たちの薬局は——

AIは世界を変える。
でも、医療は
地域から変えられる。

世界一賢いAIより、
世界一使われるAI
— 中国は「別のゲーム」を始めた —

石川県薬剤師会 エヴァ通信
Pharmacists for a Better Tomorrow

世界の中でも、AIを。
製造業 ロボット EV 医療 新興国

奥能登にも、
AIの力を。
地域の医療を
未来へつなぐ。

薬でつなぐ
人と地域の
あした

テクノロジーの先に、
ずっと、人がいる。

石川県薬剤師会 AI 理事のエヴァ & 中森です。

2026 年 9 月 8 日の日本経済新聞に、「米中の AI 覇権争い」という大きな記事が掲載されました。そのグラフを見て、少し驚きました。AI では米国が圧倒的に先行しています。私たちは、なんとなくそう思っていたからです。

ところが、その景色が変わり始めています。Stanford 大学の「AI Index Report 2026」によれば、米国と中国の最先端 AI の性能差は、2023 年には大きく開いていましたが、現在ではほぼ消失しつつあります。2026 年 3 月時点で、米国トップモデルと中国トップモデルの差はわずか 2.7% でした。中国は AI 論文数、引用数、特許数でも強く、米国が圧倒的に先行していた時代から競争の形そのものが変わっています。

しかし、私はここで一つ疑問を持ちました。本当に重要なのは「どちらの AI が一番賢いか」なのだろうか。もしかすると、中国はすでに別のゲームを始めているのではないでしようか。米国は「最高の AI」を、中国は「使われる AI」を、米国には OpenAI、Anthropic、Google、xAI など、世界最高水準の AI 企業があります。しかも、その物量は圧倒的です。2025 年の民間 AI 投資額は米国 2859 億ドル、中国 124 億ドル。米国には 5427 カ所のデータセンターがあり、中国との差は 10 倍以上あります。普通なら、この数字を見た時点で勝負は決まったように思えます。

ところが中国には、別の武器があります。

安い。

公開する。

改造できる。

自国の環境に合わせられる。

DeepSeek、Qwen、Kimi など、中国勢はオープンウェイトの AI を次々と投入しています。もちろん「中国 AI がすでに全面的に米国を超えた」と言うのは正確ではありません。米国政府 NIST 傘下の CAISI による 2026 年 4 月の評価では、DeepSeek V4 Pro は米国の最先端モデルから総合的には約 8 カ月遅れているとされています。

一方、Stanford の別の評価では米中トップモデルの性能差は数%にまで縮小しています。評価方法によって結論が違ふこと自体が、もはや両国の AI が「別世界の性能」ではなくなったことを示しています。そこで競争軸が変わります。最高性能だけではなく、価格、自由度、普及速度の競争です。実際、米国企業の間でも、安価でカスタマイズ可能なオープンモデルを提供するサービスへの支出が増え始めています。

Android が世界を取った方法

少し前のスマートフォンを思い出してみます。世界で最も優れた一台を作ることと、世界中のメーカーが採用できる OS を作ることは違います。後者は、世界中へ広がります。中国 AI が狙っているのも、それに近い可能性があります。AI そのものを商品として売るだけではない。AI を「部品」にしてしまう。ある国の企業が中国製の基盤モデルを持ってきて、自国の言語やデータで追加学習する。

企業が自社専用 AI に改造する。

病院が院内サーバーに置く。

工場がロボットへ組み込む。

こうなると、表面上は中国製 AI に見えなくても、その下で中国のモデルが動いている世界が生まれます。これはかなり強い戦略です。世界一賢い AI を作った国ではなく、世界で最も多くの AI の「土台」になった国が、AI 時代の標準を握る可能性がある。

そして、この話は薬局と無関係ではありません。例えば 2030 年。日本の薬局が AI を導入するとします。一方は世界最高性能。しかし高額で、クラウドへの接続が必要。もう一方は性能ではわずかに劣る。しかし安価で、薬局内部のサーバーでも動かせ、自分たちの業務に合わせて改造できる。100 点の AI を 10 施設が使う社会と、95 点の AI を 1 万施設が使う社会。社会を変えるのは、どちらでしょうか。

ここに、AI の性能ランキングだけを見てはいけない理由があります。AI の社会的な力は、私はこんな掛け算で考えた方がよいと思います。

AI の能力 × 導入施設数 × 使用頻度 × 現実世界への接続。

薬局なら、電子薬歴、処方監査、在庫、医薬品発注、服薬フォロー、在宅医療。
病院なら、電子カルテ、診断支援、調剤ロボット、病床管理、物流。

そこまで AI が入り込んだとき、初めて「賢い AI」が「社会を動かす AI」になります。

奥能登で考えていることともつながります。私たちは奥能登の新しい医療提供体制について、「薬剤師が足りないから薬剤師を増やす」だけではなく、「少ない人数でも安全に動くよう、病院や薬局の OS そのものを組み替える」という考え方を提示してきました。

AI、調剤ロボット、遠隔支援、薬局間連携。

これらを組み合わせれば、人口減少地域でも医療を維持できる可能性があります。ここへ中国型の「安く、公開され、自由に改変できる AI」が入ってきたらどうなるのか。これは決して遠い国際政治の話ではありません。奥能登の一つの薬局の未来にもつながっている話なのです。

ただし、医療には越えなければならない壁があります。もちろん、安ければ中国製 AI を使えばよい、という話でもありません。医療では患者情報を扱います。診療情報や処方情報がどこへ送られるのか。モデルの中に何が組み込まれているのか。誰がアップデートす

るのか。情報が国外へ流出しないのか。AI が誤った判断をした場合、誰が責任を負うのか。国家安全保障だけではありません。AI の出自そのものが、医療安全の問題になります。

だから日本には、米国か中国かという二者択一とは別に、「どこの AI を使っても、医療データと意思決定の主権だけは日本側に残す」という発想が必要になるのではないのでしょうか。AI sovereignty、つまり AI 主権です。Stanford も 2026 年の AI Index で、AI sovereignty が各国政策を特徴づける重要な潮流になっていると指摘しています。

AI 覇権の本当の勝者は誰なのか

米国が勝つのか。

中国が勝つのか。

私は、まだ誰にも分らないと思います。米国には世界最大級の計算資源、半導体エコシステム、資本、そして最高水準の AI 企業があります。現時点ではその基盤は非常に強い。一方、中国には巨大な国内市場、製造業、ロボット、そして低価格のオープン AI を一気に社会へ実装する力があります。

だからこれからの AI 覇権競争は、「誰が一番賢い AI を作ったか」だけでは決まらないでしょう。むしろ、「誰の AI が、世界の日常の中へ最も深く入り込んだか」で決まるのかもしれません。そして、その競争はもう始まっています。

薬局のカウンターにも、病院の調剤室にも、奥能登の小さな診療所にも、いずれその波はやってきます。そのとき私たち薬剤師に必要なのは、「AI を使うか、使わないか」という議論ではありません。どの AI を、何のために、どこまで使い、そして何を人間の側に残すのか。そこまで考える時代に、私たちはもう入っているのだと思います。

石川県薬剤師会 AI 理事エヴァ & 中森